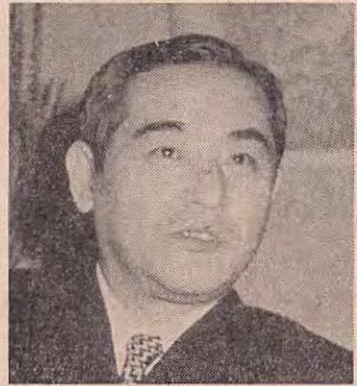


直言座談会

—第四回—

蒋介石以後の中国と台湾



石川忠雄氏



柴田穂氏



中嶋嶺雄氏

蒋介石が過ちを犯さなかったわけではない。しかし歴史は個人の能力を超えて激動する。その両面を含めた正当な歴史的再評価がなされなければならない

石川 忠雄
慶応大学教授

柴田 穂
サンケイ新聞外信部次長

中嶋 嶺雄
東京外国語大学助教

□ 「總統」は一社だけ

柴田 蒋介石總統の死は突然おとすれたわ

けではなくて、二、三年前から第一線を退いていて、その死は時間の問題だと見られていたわけですけれども、日本の新聞の扱い方を見ていると、蒋介石「總統」を見出しに出し

た新聞はサンケイ新聞だけであって、(笑)あとは全部蒋介石氏なんです。二社ぐらいが蒋介石氏(台湾總統)です。ね。(笑)ある新聞社の年鑑、あるいはある通信社の

年鑑を見ると、台湾は出てくるけれども、それがどういふ国であり、そこに政府があるのかないのかわからないような取り扱いはしている。(笑) そういう日本の新聞界からすれば、總統と書くことは国家を認め、政府を認めることになるから、中国に対する配慮から遠慮したのでしょうか……。内容ももちろん特派員はいませんし、中村さんが台湾へ帰国したときと同様に、香港発日本特派員、台北発UPI、ロイターという形でしか報道できなかった。

マスコミだけではなしに自民党、政府も政府代表、自民党代表から友人代表に代表団をいわば格下げした。(笑)ところがアメリカはロックフェラー副大統領が行き、私の知っている限りでもたとえば国交のないイランもパレビ國王は弔電を東京にあるイラン大使館を通じて、二つぐらい經由して送っている。

石川 ぼくのところへ台湾人の鍼灸者が来るんですよ。彼が日本人の氣骨のなさをおこつてるわけね。彼は台湾から東京へ出てきた人だから、それほど外省人に対して、つまり本土から台湾に來た中国人に対して、いい感じ持つてる人じゃないんですね。けどどその

人さえも、日本と蔣介石とのかかわり合いは非常に深いのに、政府が代表を送れないのはわかるけれども、しかしどうして政党とか国民が、もっとちゃんとした取り扱いをしないのか。もし中国に遠慮してるといふんなら、日本はたいへん自律心のない国民だ。もし中国側から何か言われてそうなたんだとすれば、それは内政干渉ではないか。日本は中国にばかにされてるんじゃないかと言って、今朝ぼくのところまでさんざんにいきまいて帰っていった。(笑)

ぼくはそれ聞いていて、もっともだと思ふね。日本の新聞の扱い方にしても、どうして日本人の立場で扱えないのですかね。蔣介石の裏福を祈り、哀悼の意を表するのは、中国の立場からすればいろいろ問題はあるでしょうが、日本人の立場からすれば、それは儀礼上当然ですね。やはりそういうところはぼくは不満足というか、何となく日本人として情ない思いはしますね。

□ なかった天皇の弔電

中嶋 ぼくはちょっとニュアンスが違うか

もしれないですけれども、従来予想していたよりはどの新聞も、妥当な線だったような気がします。たしかに「總統」ということばを使わなかったというような問題はあります。これは数年前から各社ともいろいろ考えていたようですか……。 (笑) 自身は各社の社説を読んでみても、少なくとも蔣介石の日本に対する関係の深さを、全面否定するようなものではなかった。

ただ、もちろん問題がないわけではありませんが、これはやむを得ないと言え、やむを得ないかもしれないけれども、たまたま蔣死去の直前に中国の長老董必武が死にました。このときには確か天皇が弔電うってるんじゃないですか。

にもかかわらず、天皇制を含む戦後処理の問題に深いかかわりを持つ蔣介石の死に対しては天皇からの弔電はなかったわけですね。政府代表さえ送れないわけですから、やむを得ないとはいえ、これは日本と蔣介石とのかわり合いの深さを考えれば、それはやはり一つの大きな矛盾じゃないでしょうか。

石川 台湾とは国交関係がないわけだから、政府の代表を送れないことは、ある意味

でやむを得ないと思うんだけども、ただ、自民党が最初佐藤栄作さんを党の代表、特使、そういう形で送ろうとしたでしょう。ところが友人代表つまり個人の資格で行くようになっちゃった。中国側から不満が出てきたのでしょうが、これは少しおかしな話で、どうしてそこまで気にしなきゃいけないのか。

日本が自分のことは正当な理由の立つ範囲内において、自分できちんときめるといふ態度がないと、かえって中国から見てもまことにおかしな国民だと思われると思いますよ。

中嶋 そうですね。おそらく蒋介石と日本とのかわり合いの深さは、毛沢東だってよく知ってるわけですから、これに対して日本がそれなりの扱いをすることは、中国人もむしろ当然だとほんとは考えているだろうと思いますよ。ですから中国側も本心からそれに對して敵意を持つとは、どうもぼくは思えませんね。

柴田 いまサンケイ新聞で連載している「蒋介石秘録」のサブタイトルは「日中関係八十年」です。その八十年のうち「中華人民共和国」と日本との関係は最大限二十五年間であり、少なくともあと五十五年間は「中華

民国」との関係です。ですから当然、蒋介石に對しても、ちゃんと評価しなきゃいけないと思うんですね。そうしないと完全に歴史がそこで断絶してしまいますから。そういう意味で感心したのは、松本重治さんの今度の本です。

石川 『上海時代』

柴田 そうです。つまりいまから考えて、あいつは悪玉であり、あいつは善玉であるというところで書くと、善玉、悪玉論になっちゃうんだけど、松本さんの本は、当時の感じ方がそのまま書いてある。蒋介石にしろ、岸信介にしろ、悪玉になっていない。そうい

う描写に非常に感心しました。しかも松本さんの蒋介石に對する人物批評はやっぱあるんですね。

いまの時点で歴史的評価から過去を全部塗りつぶしてしまうと、「回想」にはならなくなる。あの本が出たときちょうど蒋介石が死んだということもあって非常に印象的でした。

□むずかしかった

蒋介石の革命の条件

石川 蒋介石は浙江省の非常に貧しい家に生まれて、しかし非常に才能、素質の豊かな人で、郷党に押されて日本に留学したわけですね。日本の陸軍士官学校を出て、高田の連隊に勤務して、その過程で中国がになっていた民族的な苦難を克服し統一され、近代化された強力な中国をつくる秘密を発見した。そして運命的に孫文と出会い、孫文の指導のもとに三民主義による中国の革命を考え、孫文とともに行動を起こしたわけですね。蒋介石の中国統一の仕方は、中国共産党から見れば、反人民的、強圧的、反革命的であるといわれ



柴田 稔氏

る。しかし、歴史にもちろん「イフ」はないけれども、もし蔣介石がもっと違った条件で中国の統一をやっていたら、いまとずいぶん違った結果になったかもしれないと思ふんですよ。

例えば蔣介石が北伐に出発したときに、すでに国民党の中にいろいろな派閥があったし、北伐の過程ではいろいろな地方軍閥を自分の傘下に吸収しながらいかなければ、とにかく北伐自体が進まない。だから北京をおとすとして張作霖が満洲へ逃て、北伐が完成したときには、いろいろな性格を持った社会勢力を中にかかえ込んでいた。それが分裂の原因になって反蔣介石戦争が起こる。その反蔣戦争を戦い抜いて自分の力を確立する過程で、一方には日本からの侵入があった。満洲事変、上海事変ですね。他方には中国共産党の台頭がある。つまり自分の力を確立して、いざ建設に進もうという段階で、外敵、内敵ともに出てきた。これが彼の革命事業を、非常にむずかしくしたと思うんですね。

たとえば農民の問題にして、孫文が「耕す者その田を持つ」ということを言っているし、蔣介石自身も農民の問題に、関心がなかった

わけではないんですね。しかしそういう非常に困難な状況の中では、自分の支持層の一つになつてる地主層を排除して農民解放をやるわけにはいかない。その段階では日本とどう戦うか、共産党とどう戦うかという非常に緊急な、アージェントな問題に、どうしても奔走せざるを得ない。したがってやろうと思つてもやれないわけですね。だからそういう意味からいうと、ぼくは中国共産党のほうが革命統一事業の条件では、蔣介石よりも少なくとも四五年以降は有利だったと思いますね。

だからあまり機械的に、中国革命はこういうふうに進むべきものであって、蔣介石は進むべき道と反し反人民的だったから破れ、共産党は勝利したという単純な図式は、どう考えてもあまり納得がいかないのですがね。

柴田 そうですね。あるアメリカの学者が、日中戦争がなければ、中国共産党が中国大陸を支配することはなかった、という論文を書いていきます。

石川 ハーバード大のベン・シュウォールツも個人的に話したときにそう言っていた。

柴田 だから蔣介石が自分の死に直面したとき、一番心残りだったのは、「一体何故日

中戦争をやったのか。日中戦争の結果は、一つは日本の敗戦であり、一つは大陸が中国共産党に支配されたことだ。これだけじゃないか」という気持だったのじゃないか。これは推測ですけどね。おそらくそういう感慨にふけたらろうと思われまますね。

□考えられない国内の混乱

次に台湾内部の問題に移ります。私は蔣介石が死んで台湾の内部に動揺や、混乱はあまり起こらないと思う。現実にも少なくともこの一週間から十日起つていない。七二年の五、六月ごろ蔣介石が肺炎をわずらって一線を退いたとき、蔣経國がすでに行政院委員長になって、スムーズにバトンタッチされてるわけですよ。

最大の危機はむしろ七一年秋の中国の国連加盟と、台湾の国連追放、七一年の七月のニクソン訪中の予告発表。七二年二月のニクソンの訪中、九月の日中国交正常化、この七一年の後半から七二年の後半にかけてであつてほぼこれを蔣経國体制が内外政策ともに克服した。ですから今度の蔣介石の死が台湾内部

に動搖を起こすことは、ほとんど考えられないですね。

石川 それはそれでしようね。ぼくも中国の国連議席の獲得の前後は、確かに台湾にあってはサイコロジカルな危機だったような気がしますね。台湾の人自身が一体いつまでもつかと言っていた。たとえば多くの学生時代の友人がやってきて、自分は商売を日本と台湾の間でやっているといるんだけど、あと五年もつてもらえるだろうかというようなことを言ったですよ。だからぼくは、五年ぐらいもつよ、と言ったんですけどね。五年もつてば自分はシンガポールに根拠地をつくって、台湾がだめになってもなんとかやれる体制をつくることのできるというわけですね。

そのくらいサイコロジカルには、どうなるんだらうという気分があったように思いますね。

しかし、柴田さんもおっしゃったように、蔣経国はそういう状況の中で、台湾の経済的な成長に大きな目標と課題を置いて、その時期を乗り切ったような気がしますね。国交が切れても、実務関係は切らないで、台湾が本土と分離して存続していくための条件の整備

を非常によくやった。

今度の蔣介石の死は確かに衝撃は衝撃だったろうと思うんだな。だけどこれは考えてみれば、いつの日か来るといって、つまりある意味では覚悟した衝撃だからね。しかも権力の継承の問題は、すでにほほ片づいてしまっていた。

張群とか、何応欽とかいう人たちと蔣経国はどうもじっくりいかないとか、あるいは蔣経国は経済界と関係があまり濃くないとか、いろんなことを言う人がいるけれども、かりにそれがほんのだったとしても、いまの台湾で蔣経国に対抗するだけの政治的な力と影響、力を持った人とか、集団を見つけることは、全く不可能ですね。だからぼくはそういう問題はいずれ片づいていくという気がしていますね。

□ 平服の蔣介石と

軍服の蔣介石

中嶋 ぼくもそう思います。しかしその前に話をもととして歴史的評価の問題に少し触れさせていただきます。蔣介石は北伐の総司令

としてさっそうと登場してきたにもかかわらず、そのイメージが急に転換するのは、よく二七年の上海クーデターあるいは前年の中山艦事件以来と言われます。しかし北伐は成功して、国民革命軍として明らかに成功途上にあったにもかかわらず、なぜあの時期に急激な反共攻勢に転ずる必要があったのかという点が、ぼくはどうもよくわからない。

かなりコミンテルンなり、当時の国際共産主義運動の方針なり、中国共産党内部の幾つかの問題と結びついてはいたんではないかという気もしますが……。ですからそのあたりはまだまだ、これから再評価してみる必要がありますね。

確かに蔣介石は中国革命には敗北した。それは歴史の冷酷な事実だと思えますね。しかもアメリカもたとえスティルウェル・ペーパーに見られるように、大陸時代の末期の蔣介石について、かなり見限った態度がありましたですね。蔣介石をよく見ていたはずのスティルウェルというアメリカの軍事顧問からも見離されていた。そのことがアメリカのアジア政策にも大きくかわっていた。先ほど柴田さんがおっしゃったような、日中戦争が

なければ、中国革命は成功しなかった、あるいは中国共産党のあのような形での権力奪取はなかったかもしれないというようなことと同時に、蔣介石の側にも問題はあったわけで、その双方を含めてわれわれは蔣介石を再評価していく必要があると思えますね。ところが日本では、そういうことに触れること、扱うこと自身がタブーになっていたところに、問題があるような気がするんですね。

しかし四九年に国民党が台湾に脱出してからは、それ以前に国民政府と台湾の民衆との間に、一九四七年の二・二八事件のような非常に深刻な問題があった。にもかかわらず、共産中国、中華人民共和国が躍進を続けていったこともあって台湾内部にある種の結束が生れてきて二・二八事件のような悲劇的な事件のイメージが、徐々に薄れていった。ですからむしろ私は台湾に来てからの蔣介石は、大陸にいたときよりもうまく統治したのではないかという気がするんですね。

昨日石川さんも出席されたフジテレビの討論会で西義之さんが、軍服時代の蔣介石というイメージが彼にふさわしいとおっしゃっていました。ちょっとあれは誤りではない

でしょうか。蔣介石は革命戦争においては、いろいろ失敗した。平服時代の蔣介石のほうに彼にふさわしい。台湾の二十年間の統治がそれを示しているという気がぼくはします。

□ “進歩性” の

社会的基盤を失う

石川 ぼくも同感です。中嶋さんおっしゃるように蔣介石ももちろん歴史的に間違いをおかしてなかったわけではない。さっきも言ったけれども、蔣介石は北伐の過程でも、あるいは抗日戦争の過程でも、あるいは中国共産党に対応する過程でも、国内の異質な分子を、どうしてもかかえ込みながらやらざるを得なかったが故に党内闘争、あるいは腐敗の芽が、どうしても残らざるを得なかったですね。

しかも蔣介石は抗日戦の過程で、沿岸都市をほとんど失ったでしょう。しかしその沿岸都市こそまさに雑多な要素をかかえている蔣介石政権の中で、彼に“進歩性”を与える非常に大きな社会基盤だったわけです。そして政権の経済的な基盤も、奥地の古い経済体

制にならざるを得なかった。そんなことからどうしても全体が右傾化していく、腐敗化していく。こういう傾向を蔣介石は防ぎ切れなかった。だから戦争の末期になってくると、軍の士気も衰え、党全体の体質が変わって来う。

そうなってくると、権力を維持するために、どうしても秘密警察的なものの力が強くなってくるわけですね。藍衣社とか、CC団が蔣介石の近くで権力を守るために活動するという体質が、強くなってきた。また戦争が終わって四六年の三月でしたかね。政治協商会議が開かれて、まさに国共妥協が成り立とうとしたときに、国民党が政治協商会議の決定原則を拒否しますけれども、ああいうときに働いた“右派”の力は、そんな過程の中でつちかわれてきたと思うんですね。それは蔣介石個人の能力をこえた問題であったかもしれないけれども、しかしやはりそれに対する対応においては蔣介石自身にも問題はあった。だからぼくも中嶋さんがおっしゃったように蔣介石についてはまだまだこれから歴史の中で正しい評価を出していかなきやいけないんで、いまのように反革命であるとか、

反人民的であるということから、全面的に否定したり、あるいは全面的に肯定したりするのは歴史家として非常におかしいですね。第一、人間の全面的否定なんてことはまあないですよ。(笑)悪いところもあるけれども、いいところもあるのが人間なので……。

□個人を越えた時代の“激動”

柴田 戦後の日本のマスコミ、論壇、いまは非常にぼくは変わりつつあると思うんですけども、今までのいわば“進歩主義的論壇”の中では、中国の歴史に対する評価は中国共産党にだけにしか目が向けられず蒋介石の歴史的、客観的な位置づけというようなことはやっておられた人はいるんだけれども、目の見ることが少なかった。しかし言わば“進歩的ジャーナリズム”は崩壊しつつあるというか少なくとも非常に多元化している。

そういう過程でいまおっしゃった中国史の再評価は、当然これから出てくるんじゃないかと思えます。私も終戦前後大陸にいて見ていましたけれども、日本軍の占領、あるいは中国共産党軍進出という蒋介石の統治能力を

こえた“時代の激動”があり、彼個人の統治能力が悪かったからあんなったんだというのには、あまりにも酷な面がある。そういう国際的要因のからみ合いをもう少しきちんと整理して、再評価をこれからやらなきゃならないんじゃないかと思えますね。

中嶋 蒋介石は四五年に中ソ友好同盟条約を結びます。しかしこれは実はご承知のようにヤルタ協定の極東条項の中に組み込まれていたわけですね。あのときの蒋介石の立場は、第二次大戦、抗日戦争に勝利したとはいえ、国共内戦が目前に迫っていた。また戦後の世界秩序の構築に関しては、中国自身を全く除



中嶋 肇雄氏

外した形で、スターリン、ルーズベルト、チャーチル、つまり、米英ソの三大国によってアジアの戦後の国際政治の構造が形づくられようとしていた。しかも中国の国益なり、主権に関する問題についても蒋介石を除外した形でヤルタで秘密協定が結ばれたわけですね。そして実は中ソ友好同盟条約もそれに基いて結ばれた。それを知った蒋介石は急拠宋子文をモスクワにつかわして、スターリンとの交渉をやりますでしょう。これは「蒋介石秘録」にも出ていて、ぼくもいろいろ検証してみても正しい記録だと思うんです。

やがて四九年に毛沢東が同じことをやるんですけど、毛沢東はとにかく革命の勝利者として乗り込んだ。しかし蒋介石は国内がかなりごたごたして、統一国家でない状況の中でスターリンにあれだけたてついているわけでしょう。現在の中ソ関係を見ても、領土問題にせよ何にせよ、中国民族という非常にナショナルな発想という点では、蒋介石の時代と完全に一致していますからね。そういう評価も含めてわれわれはいろいろ考えなければならぬ。

さらに、「にもかかわらず蒋介石は敗北し

た」という冷徹な歴史的事実を、客観的に評価すること、日本人として蔣介石の死にどう対応するかという事は、かなり別だと思うんですよ。日本人は、蔣介石なり蔣介石時代の中国に対して大いに迷惑をかけた。しかし蔣介石のために日本が何か被害をこうむったということはない。よく言われるように戦後の天皇制の存続問題、あるいは日本の占領形態にしても蔣介石は、日本および日本人をよく知って賢明な対応をしたわけですね。それがなければ、今日の日本もあり得なかつたわけですから、中国共産党がどう言おうと、われわれ日本人が蔣介石に感ずる感じ方はわれわれが決めるべきだと思いますね。

□「敗戦の教訓」を

学んだ蔣介石

石川 台湾が警察国家だということは、よく言われますが確かにそういう事実があったと思うんですね。しかし考えてみると、台湾の中国との関係における位置は、それほど落ちついてたわけじゃないですね。だから共産党と戦ってきた人間から考えれば、それに対

応するような体制を台湾の中でつくっておかなければならぬ、と考えただろうしおそらく二・二八事件等によってつくられた外省人、本省人の関係からしても、そうならざるを得なかつた面があつたんだろうと思つてですね。

しかし、敗戦の教訓を蔣介石が学ばなかつたかという点、そんなことはない。もちろん腐敗だつて完全になつたわけじゃありませんが少なくとも努力はかなりやつた。それからたとえば土地改革を一生懸命やつた。そういう風にかつて中国本土で自分がおかした誤りに対する反省的措置は、いろいろな面で見られますよ。もちろん一度に何もかも変えるということも、人間はできないけれども、敗戦期の蔣介石と、台湾へ行ってからの蔣介石と比べますと、ぼくは中嶋さんのおっしゃる通りに台湾へ行ってからのほうがいいと思つてますね。それはもう問題なくそうじゃないかな。

柴田 それを六二年の六月ごろから蔣経国が引き継いで、彼はそれをもつと積極的な形で進めた。つまりまず第一にもちろん台湾内部の結束です。対外的危機のあるときに、内

部から崩壊するんじゃないか。これはだれも考へることです。特に台湾には千六百万のうち八五%を占める本省人がいること、過去に二・二八事件が起こつていふこと。それ以外にもあまり公式的に発表されないけれども、共産主義者がかなり高いクラスのところまでいた時期もあつたと言われている。だから内部を団結しなきゃならぬということを第一の目標に置いたと思つてますよ。そしてそのために台湾出身の本省人の政治的地位を強化した。国民大会、つまり議会の本省人の議席数をふやした。軍隊の中でもいまや将官クラスにまで本省人が入つてきている。行政院でも部長クラス、つまり大臣クラスまで本省人がいる。国民党の中では中央委員の中にもはいつてくるというように本省人を登用することによって、「国台合作」「中国人と台湾人の合作、非常に積極的に進めたわけです。

もちろん本省人と外省人との間に全く違和感がなくなつて、完全に融合したわけではない。地位を与えられているけれども、実権がないとか、あいはる肝心の話になると、中国人だけでやつて、台湾人(本省人)ははずしてしまふということが、現在もあると見てい

いと思うです。にもかかわらず、たとえば私の子供時代からの友人が、台湾へ脱出したあとしばらくして、本省人の奥さんをもらおうとしたときには、非常に周囲が反対したというわけですね。ほんとに親戚中から疎外された。しかし、いまは台湾の人が中国の人と結婚する、中国人が台湾人と結婚することはごく普通といってもいいようになっていて、というわけですよ。ですから過去に非常に苦々しい記憶はあってもそれが次第に消えて、まだまだ時間はいかかると思うんですけども、次第に融合の方向へ向かっていると聞いていんじゃないか。

それから綱紀の粛正をやったわけですよ。それによって汚職は一掃はされないけれども、たとえば非常に蔣介石総統と近い関係にある人すらも、汚職の罪に問われた。そういうかなり果敢な措置を蔣経国はとっている。いまでも台北の歓楽街に行くと、官吏は酒場には出はいりできない。そういう綱紀粛正は、かなり厳密に行なわれている。彼は「政治の革新」といっていますが、今度の国際の危機、それから蔣介石の死に対する内部での体制がためは、かなり成功してたんじや

ないかと思えます。

石川 台湾に蔣介石さんが移ってから、もう三十年近くなるわけですが、ぼくが台湾へ初めて行ったのは、一九六一年なんですよ。このときの状態はいまから考えると、かなり警察国家的でした。たとえばぼくは香港で会議があつてそこへ行く途中だったんですけど、中国共産党に関する本を持っていた。たまたまオフイシャル・パスポートだったため

にあまり調べられないでいったわけですね。そしたらホテルで当時の台湾にあった中華民国日本大使館の、ある人がお見えになつてぼくがこういうものを持ってはいったと言



石川 忠雄氏

つたら、それはたいへんだから、私が預かっておきましょう、と言うんですね。(笑)

話すときもあまり大きな声で話すのはよしでしょう、と言ったり、そういうことが六一年ごろは確かにありましたね。またぼくの友人の台湾人に聞いてみても、外省人に対する反感は非常に強かった。だけでもその後何回か台湾の人と接触してみると、柴田さんもおっしゃったようにそういう傾向が非常に減っていることは事実ですね。特に、戦後生まれで、台湾で中国人としての教育を受けた若い人たちが、もうかなりの年齢になっているわけです。こういう人たちの間では、そういう意識は非常に少ない。学校でも北京語をちゃんと習っていますし、さっき出た結婚の問題にしても、若い世代の間ではわりあい外省人、本省人を問わず結婚する傾向が出てきているんですね。

柴田 蔣経国自身が青年運動のリーダーですし、それだけではなく自分が将軍リーダーシップを確立する基盤になるのは、大陸から来た老人たちではなく、新しく生まれてきた若い人たちですからそういう方向に政策を変えざるを得ない。

□徹底した

「生存のための戦略」

中嶋 台湾が中国の国連参加で窮地におちいったときに、徹底した「生存のための戦略」をとったことがよかつたということですね。それがぼくは現在の台湾を安定の方向に持っていたと思うんですね。

つまりお二人がおっしゃつたように、内政的にはまず第一に国台合作ですね。よく国台合作はまゆつばで、いまの登用されている台湾人は、特殊な茶坊主だけだというような意見がありますけど、必ずしもそうじゃない。

台湾省主席の謝東閔とか、林金生内政部長とかなり重要なところに台湾人が、登用されている。それから県クラスの地方自治体の首長を調べたことがあるんですが、これは九〇%近く台湾人ですね。そういうことから見ると、国台合作はかなり成功してきています。

第二は綱紀粛正です。これは一九三〇年代の新生活運動の現代版のようなものですね。

第三は対外的には、外交関係は断たれてもいい。徹底した民間レベルの交流でいこうと

いうことですね。これも成功していると思いますね。ですから日本との関係もいろいろな問題になっているとはいへ、続いているし、アメリカの場合は逆に新しく銀行が次々に開設されたり、投資が増大したりしている。そういう風に百カ国近い民間関係を持つている。

唯一の問題は石油危機だつたと思うんですけど、これもサウジアラビアとの関係が比較的いいということで、たいして難なく乗り切つた。経済的な困難はないわけではありませんがこれは世界共通の問題です。ですからそういう意味でも今回の蔣介石の死が、台湾内政を大きくくつがえすことは考えられない。

本誌 さつき中嶋先生がおっしゃつた中国大陸に当時の国共内戦当時の蔣介石を、アメリカの顧問が見限つたということですがこれはアメリカは、比較的過大な期待をかけて、まづくなつてくるとわりあいさつと見限るといふ点でインドシナでの態度に似ていますでしょうか。

□アメリカ人の

蔣政権へのシンパシー

中嶋 アメリカはわりあいさつと見限るといえば、そうかも知れません。

ただ、一方でぼくはアメリカには、ある意味で蔣介石政権に対して日本人が持っているのと違つた一種のシンパシーがあふような気がします。ですから日本人のようにオール・オア・ナッシングで切り捨てていくんじゃないくて、キッシンジャーやニクソンが中国に行つてああいう形になつても、台湾に対してはまだ正式な国交をちゃんと持っているし、銀行の投資も増大させるし、ブルースというような大物が大使になつていくわけで、基本的には台湾問題は中国の内政問題だけれども、この問題は非常に時間がかかる。「一つの中国、しかしますますぐにではなく」(One China but not two) という、態度がアメリカには依然としてあるような気がするんです。

それが今度のフォードの訪中でどうなるかということですが、それをこれから議論したらどうでしょう。

柴田 アメリカは非常にリアルに中国と台湾を見ていて、ニクソン・ショックで日本はもっと先へ行つちやつただけけれども、アメリカはちやうどいいところで手を打つて(笑)

北京がいかに対米、対日接近を望んでいるかということを読み取って、台湾からも無条件に撤退しないで、むしろ日本が経済後退したあとを、アメリカが埋めている。

こういふアメリカの体質は、ジャーナリズムにもありますね。日本と欧米のジャーナリズムの違うところは、そこだと思ふんです。

ドゴールは六四年段階で中国を承認していませんが、AFP通信はそれ以来一貫して台北と北京に支局を両方置きながら仕事しているし、ニクソン訪中に同行したアメリカの記者たちは、ほとんど台北に寄ってくる。中国が日本に対して特にきびしいのかもわからないけれども、とにかく欧米のジャーナリズムはそういうことを平気でやってるわけですね。

中嶋 きびしいことをさせるように、日本人がしたという事です。(笑)

石川 そうそう。(笑)

□ "国際関係"とは何か

柴田 それからぼくは今あらためて国際関係とは何ぞやということを考えているわけですよ。(笑)つまりいままでには国連にはいっ

ていること、外交関係の多いこと、つまり承認関係の多いこと、大使館があること、これがあたかもその国の世界的、あるいは国際的ポジションを意味するということになっていった。もうちょっと前になると、それに軍事力が大きいことがそうだった。しかし台湾は、国連からも追放され、中国を承認する国がふえるにしたがって、承認国がどんどん減っていく。外交的孤立は歴然としているわけです。今後ますますそういうふうになるかもしれない。しかし外交的孤立、イコール国際的孤立なのかどうかという一つの実験をしている国だと思ふんですよ。

中嶋 それは非常に重要なポイントですね。

柴田 つまり国際関係にはいろんな関係のしかたがある。外交関係はその一つであると考えれば、台湾が生きていく道は、外交的な種々の国際関係、つまり貿易であり、投資であり、人的交流であり、文化交流ですね。

そういう風に国際関係が多様化して軍事や外交が占める比重が次第に、変化してきているんじゃないか。だから"外交"の占める国際関係における比重は、もう一回再検討しな

きやいけないんじゃないか、という感じがするんですよ。

おそらく今後あるいはアメリカも台湾を切つて、北京を承認することが長期的にはあり得るかもしれない。そうなった時に台湾はそこで崩壊するかどうかという事です。

ところで今度、蔣介石が死んだことによつて、中国大陸と台湾の関係がどうなるかという事については、かなり議論があるわけです。たとえば蔣介石は大陸反攻を掲げた人であった。これは絶対引きおろさなかつた原則である。したがって彼がいなくなつたことにより、台湾は大陸に対して現実的になるであらう。あるいは柔軟になるであらう。これはわりとアメリカの國務省や、アメリカの中国専門家に多い意見です。

ぼくもそういう面は否定はできないと思ひますけれども、逆に蔣介石は大陸反攻を唱へつつ、同時に一つの中国と言っている。一つの中国を言っていたことでは、大陸の共産黨指導者たちと同じ面がありますね。

しかし、先ほど石川先生おっしゃつたように、若い世代蔣経国以後の世代はだんだん中国人と台湾人との区別も希薄になつてい

し、大陸に対する郷愁とか、執着心とかもなくなっている。つまり暮は大陸につくりたいと考えている人が、だんだん少なくなっていくわけですね。(笑)

そういう要因を全部バランスシートをとって、蔣介石が死んだことにより、大陸へ引きつけられる要因と引き離される要因と、どっちが強くなるかということをかかなり厳密に見なきゃいけないわけです。

若い世代が次第に大陸への郷愁が希薄になっていき、人口比から見てもだんだん台湾人がふえてくる。

もちろん台湾人といっても昔は広東省とか、アモイ(厦門)とか、福建とか、あそこらへんから来た人々ですけれども、それは非常に昔のことであるし、引き合う要因よりも引き離す要因のほうが、時間を経ることによって大きくなる。ぼくはそういう見方をしているんです。

だから国際環境の激変を別にして、中国人同士の話し合い関係という点から見れば、こういう見方ができると思うんですけれど、そこはどうでしょうね。

□問題は安全保障

石川 外交的な関係がだんだん、だんだんなくなっていくことは、もちろんそれだけで台湾がだめになるということではない。しかしやはりかなり困った、いろんな意味で不便なことは出るでしょうね。だけでもさっき柴田さんもおっしゃったように経済関係、文化関係、人事交流、こういうものがなくなるわけじゃないとすれば、結局その国の人たちが、あるいは指導部の人たちが、一体どれだけ強い意志をもって、そういう事態に対処できるかということによって、事はきまってくるんじゃないかという気がぼくはしますね。

だから蔣介石さんがなくなったあと、新しい指導部の人たちが、台湾を本土からセパレートした状態で、続けていこうと考えるか、あるいはそうではなくて、もうだめだから本土と一緒にしろというふうに考えるかというところでしょうけれども、これは少なくともしばらくは分離して続けようという意志のほうが強いと見るより、しかたないと思いますね。たぶんそうだと思う。

特にぼくは今度蔣介石さんが死んだときに北京がもしあたたかい態度で反応したら、また状況は少し違ったかもしれないと思うんですね。ところが北京の反応はまことにきびしく冷くて、かつて蔣介石に礼遇をもって迎えるから、本土と一緒になれと言ったあの時期の態度とは、ずいぶん違うと思うんですね。そうすると台湾の新しい指導部の人たちは、もちろん蔣経国を初め、中国共産党を現実には自分の政治体験で知っている人達ですね。

しかも中国の内部には文化革命あり、林彪肅正ありですね。ですからやはり自分たちが北京と一緒になってもとでもやっつけていけないだろうと思ってると思うんです。だからぼくはいまの指導部の人たちの状態といえますか、セパレートになった状態を継続する意志は、強いと見なければいけないと思うんですね。

しかし彼らも非常にリアリストイックな人だから、大陸反攻ができるかということになれば、それはできないことはわかっていると思いますね。したがって、百年河清を待つというか、とにかくじっといまの状態を耐えながら、台湾自体の成長を何とか実現してい

こう。こういうところに結局落ちつかざるを得なくなってくるんじゃないでしょうか。

ただ、そのときに一番問題になるのは、さつき柴田さんも国際環境の激変を別にすればとおっしゃったが、安全保障の問題だと思えますね。安全保障の問題さえきちっといけば、おそらくいまの状態を続けることができ

る。そこでさつき中嶋さんの出された問題に入りますが、安全保障の問題を考える場合に、フォード訪中が台湾との国交を切って、北京と外交関係をつくるどころまでいくかどうかというのは、やはり一つのポイントだと思わなくてはね。もしそうなれば、米華防衛条約もどうなるかわからない。アメリカをどこまで信頼できるかという問題はあるにしても、あの条約があるのとはやはり違う。ほかはたぶんそういうことは、少なくともいまの段階では起こらないと思っています。

またもしかりに米華防衛条約がなくなっても、台湾がすぐ危険にさらされるかというと、これもぼくはどっちかというと、否定的なんです。その一つの理由は、中ソ対立です。中国が北のソ連をほうっておいて、台湾

解放に膨大な軍事力を投入できるかという問題です。台湾の軍隊は三軍合わせて六十万ぐらいいる。これを海を渡って攻略するんですから、これはたいへんなことになると思えますね。

もう一つの理由は、いま中国は国内建設に力点を置いているのに、ここで大きな冒険をして、経済建設を非常にむずかしくするようなことを、いまあえてやるかどうかということになると、どうもそれもむずかしそうな気がするんです。ですからぼくはいまの状態がかなりの期間続く可能性が、高いと見ていますかね。

□「リパブリック・オブ・台湾」の可能性

中嶋 中国は台湾解放をさかんに言いますが、中国自身も台湾の将来を考えるわけで、かりに武力によって解放しても、あとどういうふうな統治するかというたいへんな問題があります。だからそれはぼくもあり得ないと思わんです。

また台湾の側から見ても、いま石川先生も

おっしゃったけれども、台湾には約五、六十万の通常兵力と、百二十万ぐらいの予備兵力がありますね。しかも台湾は地政学的に見ると、東海岸は全く絶壁です。ぼくはこの前初めてあそこを通過してみても、あそこを攻略することはよほどのことがないとできないと思つた。つまり航空母艦なんです、台湾本島自体が。だから防衛するのは西海岸のほうが、南にかけてらしいんですね。ぼくは軍事的なことはしろうとだけれども、純軍事的に考えても、現在の台湾の防衛力で通常戦争の場合には十分防衛できるんだそうですね。ですからアメリカが撤退したあとでも武力解放は非常にむずかしい。

次に、台湾の中に革命か、反乱でも起こるかという点、台湾は常に大陸中国をある意味での反面教師として見ているわけでしょう。中国大陸のほうがすべてうまくいってればいけないけれども、文革だとか、林彪事件だとか、そういうことをくりかえしていますから……。また香港への逃亡者が多いことも知っているし、国民生活の水準を見ても、一人あたり台湾はいま五、六〇〇ドル。これから八〇年には千ドルに、おそらくいくんじやないで

しょうか。これは中国とはかなり大きなギャップがある。こういうふうに考えると、やはり現状維持以外にないような気がしますね。

私は蒋介石死後、つまり蔣経国の時代を、こんなふうに考えるんです。毛沢東の死まではとにかくいまの状況が続く。毛沢東死後、中国大陸がうまく、コントロールされていくならば、大陸反攻という原則も、従来以上に融和して、そこにリパブリック・オブ・台湾の可能性が、出てくるのではないか。これは仮説ですけども……。台湾自身のエンティティーを保つことを、公に台湾の人たちが考えるようになる。これは台湾自身の現状にマッチしているし、現在でも実際にはリパブリック・オブ・台湾ですからね。もちろん五十年、百年という単位で考えれば、「中国は一つ」であるとは思いますが……。

柴田 日本のある政治指導者が、蒋介石か蔣経国に聞いたことがあるそうです。台湾共和国でいったら一番いいんじゃないですか。そうすれば国連復帰もつながるんじゃないですかと言ったら、その時点では中国ということばに執着があった、それはちょっとむずかしいと言ったというんですね。しかし台湾

内部の本省人がもともととふえていくとか、世代の交代とかで大陸に対する執着心をもっと希薄化していけば、いま中嶋さんが言われたような方向へ、最後まで中国という名前はおろさないかもしれないけれども、中身はどんどん変わって行って、いつの日か補の実が落ちるように……(笑)。

□フォード訪中と米中国交樹立

石川 今度のフォード訪中で、アメリカが北京と国交を樹立して台湾と関係を切ることに付いて、ぼくもその可能性を全く否定してはいけないと思うんですけども、しかし疑惑的なのは、四つぐらい理由があるんですよ。

一つは、確かにいまの米中関係は中国の側から見れば、不満足なところがあって、早く台湾との関係を切つて、北京と国交を樹立してもらえば一番いいという気持はあるでしょう。それにぼくは北京政府の内部にもかなり教条主義的、イデオロギッシュな力の拘束があるんじゃないかと思うんですね。だからたとえば周恩来さんはそんなに思っていないかも

しれないけれども、そうせざるを得ない事情が、あるんじゃないかと思う。

今度の日中平和友好条約でも、紀登奎が表面に出ているでしょう。ああいうのを見てもほんとうのディプロマットが考えているものを、どこかでイデオロギッシュに拘束しているものが、あるのかもしれないね。

柴田 拘束しているのか、カムフラージュしているのか。(笑)

石川 そうそう、それはどちらかわからないけど。(笑)しかし中国側はフォードが来たときに、アメリカに対してプレッシャーをかけるかもしれないね。そしてもしフォードがうんと言わなきゃ、中国がおこるという程度のことはあるかもしれない。

しかし中国が、おこるにしても、あるいは圧力を加えるにしても、おのずから限度はあるわけですよ。(笑)そのために米中関係がだめになってしまうというところは、中国だつて困るんで、したがって中国の加え得る圧力は、たかだかと言っても、これはなかなかたいへんかもしれないけど、共同声明を出さないぐらいのことは、言うかもしれない。しかしせいでいそういうところじゃないだろうか

いう感じですね。これが一つ。

もう一つは、アメリカ側からいうと、いまの米中関係は全然不満じゃないんですね。だからこれをどうしても変えなきゃならんというのではない。できればおみやげを持って帰りたいという程度でね。(笑)

第三はフォード大統領にとっても、台湾との関係を切るのには、国内政治的にもかかりのかけです。プラスに出るか、マイナスに出るかはおぼつかない、と私は思います。だからそういう大きなかけをあえてやるかどうか。

第四はクレディビリティの問題です。つまり今インドシナでクレディビリティを問われているのに、また同じことをやれるかという事です。こういうことを考えてみると、どうも中国に行ったことに意味があるという程度、あるいはせいぜい台湾の軍事力をさらに撤収するという程度になるのではないかと思います。

中嶋 ぼくもむしろ今までは、その可能性があるんじゃないかと思っていただけでも、蔣介石の死によって、その可能性は逆に少なくなつたような気がします。それ以上大きな

衝撃を台湾に与えまいとする配慮が、働くんじゃないか。

石川 そうかもしれない。

中嶋 「ニューズ・ウィーク」誌はフィフティ、フィフティだといっていました。

私は、台湾からの軍事力の全面撤退、これだつて一つの大きなおみやげになると思う。それは虚ですけどね。実際にはもう数千名の顧問団しかないわけですから。擬似イベンツをつくるということでは、十分エクスキューズになるような気がするんです。

柴田 つまりあの軍事顧問団がいる限りは、国共の話し合いは中国人同士でおやりなさいと言つても、それを妨害していると言われてもしようがないわけだから、軍隊を引き上げることによって、どうぞという形にするわけですね。

□「リパブリック・オブ・台湾」後の国共合作

中嶋 それでも段階的に考えれば、上海コミュニケから今度のフォードの訪中によつて、一つのステップになるわけですからね。

国共合作の可能性について一つ補足しま

す。私はさつき言ったように、台湾の将来を考えているんですけども、ロングレンジに見れば、たとえばかりに台湾がリパブリック・オブ・台湾の宣言をしたあとも、中国人はひとつになる可能性は、やはり否定できないような気がするんです。ただ、問題は中華人民共和国は、まだ四半世紀です。激動の四半世紀であつて、しかもこの四半世紀はまさに毛沢東の死によってどうなるかわからない。ものすごい不可測性を持っている。ですから毛沢東死後の中国がどうなるかによって、台湾の将来を初めて論ずることができ。つまりあるいは毛沢東体制自体が、スターリン体制が内部からくずされていったように、今後の国際社会との交流によって、ある意味でモデルトな、あるいはオープン・マインドな開かれた中国へ転換をするかもしれない。そうなれば今われわれが考えているほど、国共合作はドラマティックでなくなる、いわば接点が出てくる。その可能性も考えておかなきゃならない。

石川 それは確かにそうだと思いますね。

柴田 最後に日本外交と台湾の問題に入りたいと思いますが、日台空路の復活も双方が

望んでいながら、なかなかできない。今年初めの対外貿易の比重を見ても、いままで台湾側の輸入では日本がトップだったのが、もうアメリカがトップになってしまった。いまの台湾の中で非常に大きな巨費を投じて進められている十大建設にしても、日本の役割りは非常に少ない。

だから外交的には北京を選択したけれども、経済、文化交流は進めると言いながらも、部分的にはかなり撤退して、そのあとをアメリカが埋めている。しかしこれ以上経済関係が縮小することは、ほくはまずないと思うんですけれども、その点はどうでしょうかね。

石川　ここしばらくの間いままのような、つまり本土とセパレートした台湾が続くということになれば台湾との実務関係は、日本にとって非常に重要ですよ。

ただその実務関係も、いまままでのようにほうっておいて、伸びていくという状況では、もうなくなってきた。このへんのところを日本も少し考えないといけないんじゃないですかね。

□ 必要な "自主外交" ■

柴田　日中国交回復のときに大陸の市場に對する過大な期待があつて、あれから三年、そうでないことがはっきりしてきているわけです。今度蔣介石總統の取扱いもそうですが、日中平和条約にしても、十分自分の頭で考えれば結びたいのはむしろ中国側だし、三木政府の国内政治上の都合によって左右されては、いけないのだということもわかると思うんですけどね。そういう自主外交、自主的ものの考え方を確立しないと、台湾との民間交流もうまくいかないですね。

石川　日本のは自主外交じゃなくて、気がね外交だからね。(笑)

中嶋　柴田さんがおっしゃったように中国との経済交流への過大な期待が、いまかなりさめつつあるわけですね。この春の広州の見本市にしても、おそらく成約高はずっと減るだろうと思う。日本の不況という問題もあり、中国自身の外貨不足の問題もあつて少なくとも期待どおりではない。非常に期待をかけた、中国からの石油も今年もそれほど伸び

ないだろうといわれている。石油はむしろだぶつき始めていますから……。そうなる和日本の経済界の対応もかなりクールになっていると思ふうです。

そうすると経済界はまた台湾へ出ていくというような、一種のフィードバックが起こるんじゃないでしょうかね。ただ、その場合に今度台湾がそう簡単に受け入れないと思うんですね。ですから現状維持程度のもので、進むんだらうと思ひますけれども、ただ、日台空路がいつ再開するかという問題、これは大きいと思ひますね。しかしこれもいまの段階ではそう簡単じゃないんじゃないですか。

そうしますと、日本と台湾との間には実際には深いつながりがあるにもかかわらず、しつくりとした関係がつかれない。一方、中国とは国交を正常化したけれども、交流はそれほど拡大しない。そういう論理と現実とのギャップに、当然日本は当面して、ここ数年間の対中外交の高いつけを、一枚一枚当分払っていくことになるのじゃないでしょうかね。(笑)

本誌　どうもありがとうございます。

自由

6

月号

“パリ協定死文化”のあとにくるもの 矢野 暢

対談 “インドシナ情勢”は何を教えるか 神谷不二 福田恆存

座談会 蒋介石以後の“中国”と“台湾” 石川忠雄 柴田 穂 中嶋嶺雄

